

両親の養育態度が青年期の孤独感に及ぼす影響

The relationship between perceived parental attitudes and loneliness of adolescents

芝崎良典・芝崎美和

Yoshinori SHIBASAKI, Miwa SHIBASAKI

Abstract

The purpose of this study was to investigate the relationship between the loneliness of adolescents and perceived parenting attitudes. Ninety-eight adolescent subjects completed two self-report measures: Parental Bonding Instrument (PBI; Parker et al., 1979) and Loneliness Scale of Ochiai (LSO; Ochiai, 1983). The PBI is a scale that is designed to measure two dimensions of parental behavior, high care vs. low care and low protection vs. high protection. With the LSO, loneliness in adolescence is classified into four types (types A, B, C, and D). For example, type D loneliness is “the loneliness of those who can believe in sympathy but have not become conscious of der Einzelne” (Ochiai, 1983). Results indicated that the parental protection score generated by PBI was linked to the loneliness types classified by LSO. Type D students classified by LSO were perceived to have been brought up by overprotective parents.

Keywords: parental attitude, loneliness, adolescents

目的

Weiss(1973)は孤独にはふたつ種類があるという。ひとつは社会関係の少なさから生じる孤独であり、もうひとつは愛着対象を失うことから生じる孤独である。青年期はこのふたつの孤独を両方とも経験する可能性の高い時期である。児童期、子どもの生活の中心は家族であったが、青年期には友人へと少しずつ移行行く(宮下、1995)。落合・佐藤(1996)は、青年期に友人との付き合い方がどう発達的に変化していくか研究している。その分析によると、青年期のはじめには、浅く広くかかわる付き合い方が多くみられていたが、年齢が進むにつれて、こうした浅く広くの付き合い方が減少していくことがわかっている。かわりに、深く狭くかかわる付き合い方が増加していく。友人との付き合い方は、浅い付き合い方から深い付き合い方へ、広い付き合い方から狭い付き合い方へと変化していくのである。

孤独感研究の第一人者である落合(1974)は高校生を対象にQ技法を用いて、彼らの孤独感の構造分析を行っている。結果、孤独感にはふたつの次元があると述べている。ふたつの次元は、1. 人間同士共感しあえると感じ(考え)ているか否か、2. 人間(自己)の個別性に気づいているか否かという次元である。ここでいう人間(自己)の個別性とは実存主義的な意味での個別性である。ひとはもともとひとりひとり別個の存在であり、独自性をもった存在であるため、誰も自分にとってかわることはできないといった意味である。これらふたつの次元から4つの象限を得ることができる。

落合（1974）はこれらの象限を A 型、B 型、C 型、D 型と名付け、それぞれ次のように特徴づけた。A 型は、ひとは互いに理解や共感をしあえるものだと思っているが、人間の個性には気づいていないタイプである。自分が他者との融合状態のなかにいるため孤独を感じにくいタイプであると考えられている。B 型は、ひとは互いに理解や共感をしあえないものだと考え、かつ自己の個性にも気づいていないタイプである。自分を理解してくれるものがないという思いをもちがちなタイプであると考えられる。C 型はひとは互いに理解できないと思い、かつ個性に気づいており、他人への無関心や不信を抱きがちであると考えられるタイプである。D 型はひとは互いに理解できると思い、かつ個性にも気づいているタイプである。「明るい孤独」と表現できるようなタイプである。落合（1974）の研究が行われた 1970 年当時には、青年は感傷的な孤独を感じることはあっても、自己の存在を自覚することによる孤独を感じることはないのではないかと考えた。しかし、落合（1974）の研究により、青年も自己のあり方から生じる孤独を感じるようになった。

その後、落合（1983）は、孤独感の類型判別を行うための尺度 Lonliness Scale of Ochiai (LSO) を開発した。LSO は、ふたつの下位尺度からなる尺度であり、人間同士の理解・共感の可能性についての感じ方の次元（U-LSO）と、人間の個性の自覚についての次元（E-LSO）のふたつの次元をもつ。ふたつの次元から孤独感は 4 つの類型に分類される。型には落合（1974）が示した A 型、B 型、C 型、D 型があり、それぞれの特徴も落合（1974）が示した特徴と同様である。

発達的に考える場合、もっとも未成熟な型は A 型であり、もっとも成熟した型は D 型であると考えられる。落合（1989）は、各年齢で孤独感のどの類型がよく現れるのかを示すデータを報告している。13 歳では、A 型がもっとも多く、全体の 50 パーセントを占める。続いて、D 型が 24 パーセント、B 型が 18 パーセント、C 型が 8 パーセントと続く。16 歳になると、A 型（32%）を抜き、D 型（37%）がもっとも全体に占める割合の高い型になる。その後、B 型（16%）、C 型（15%）と続く。19 歳では、D 型が 65 パーセントともっともよくあらわれる型となり、A 型（13%）、B 型（13%）、C 型（10%）と続く。22 歳には、D 型の出現率は 79 パーセントとなり、A 型の 9 パーセント、B 型の 6 パーセント、C 型の 5 パーセントを大きく引き離す。13 歳から 22 歳までの間の各類型の出現率を見る限り、加齢に従い、もっともよく出現する型は A 型から D 型へと変化していくことがわかる。年齢の低い時期に頻出する型を未成熟な型、年齢の高い時期に頻出する型を成熟した型であると仮定した場合、もっとも未成熟な型は 13 歳で最頻出する A 型であり、もっとも成熟

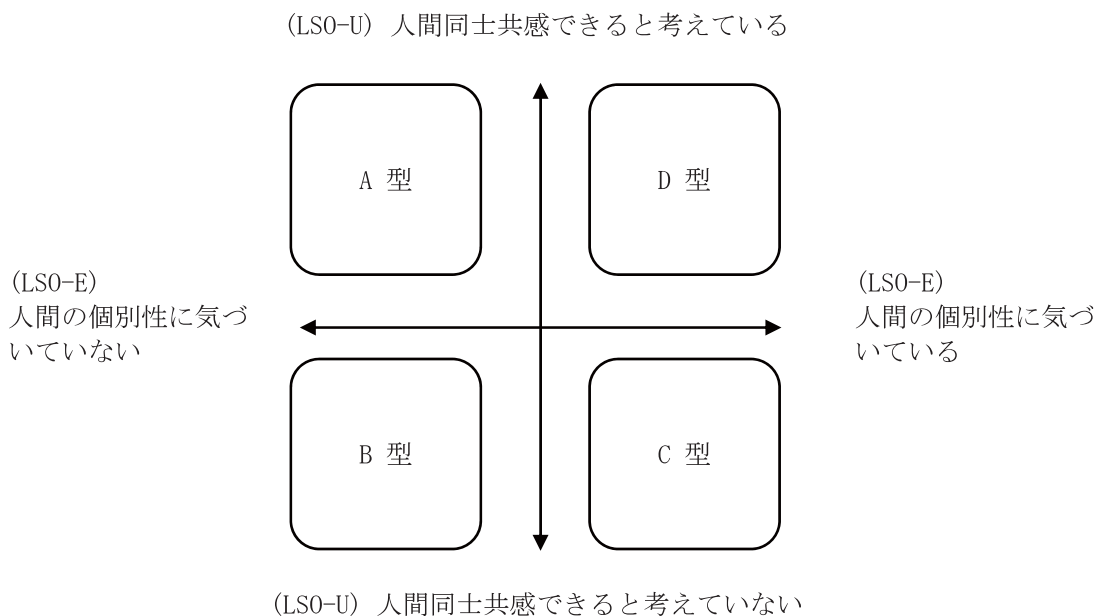


図 1. Lonliness Scale of Ochiai(LSO)によって判別される孤独感の類型

した型は 22 歳で最頻出する D 型であるといえる。B 型や C 型はどの時期にも少数であり、A 型から D 型へと移行する際に、一旦、B 型あるいは C 型を経由するとは考えにくい。

落合 (1989) の研究からずいぶんと時間が経っている。社会の状況もずいぶんと様変わりしている。落合の研究が行われた時期は、日本は高度経済成長を経験し安定した経済成長を維持している時期であった。現在、私たちのいる社会はバブル経済崩壊後の低成長社会である。社会状況にずいぶんな違いがあり、そこで生きる青年にも違いがあることは十分に考えられる。野上・天谷・太田・栗田・布施・西村・長谷川・胡琴 (2000) の研究では、大学生、短期大学生、専門学校生 525 名を対象に LSO を実施している。結果、D 型に分類されるものが 53 パーセントと最も多く、その後を A 型が 36 パーセントと続いた。B 型は 2 パーセント、C 型は 9 パーセントであった。野上ら (2000) でえられた各類型の出現パターンは、落合 (1989) の調査でいえば、16 歳の高等学校の生徒と同じ、A 型と D 型とに二分されるパターンであった。大学生 75 名を対象とした小林 (2006) の調査でも、D 型が 49 パーセントと最も多かったが、ついで A 型が 43 パーセントと多く、ほぼ、A 型と D 型の出現率が同程度となっている。落合が対象した大学生に比べ、現代の大学生が発達的に未成熟なため、このようなパターンが得られたと考えられる (小林, 2006)。

それでは、未成熟な A 型と成熟した D 型とではどのような背景の違いがあるのでしょうか。A 型と D 型の違いはひとの個別性に気づいていないかいるかの違いである。個別性とはひとそれぞれ別のあり方をしていることをいう。自分と他人とは違うということである。私たちはさまざまな他人といっしょに生活しているが、その他人を自分とは異質な他者として意識する場合もあれば、意識しない場合もある。ここで、自分のあり方とは異なるあり方を、他者性ということにする。自分と違うあり方をしている他人に会うとき、私たちはそのひとの他者性に気づく。他者性に気づくということは、ひるがえって自分のあり方の特殊性にも気づくことになる。男性という概念が女性という概念と比較して作られていくように、自分とは異なる他者と出会うことで私たちの自己が作られていくわけである。一方、自分のあり方とはあまり異ならないあり方をしている他人に会っても、私たちはその他者性を意識することが少ない。他者性に気づくことがなければ、自身のあり方を考えることができない。女性のいない世界にいる男性には男性という概念を形成することができないのではないか。このように他者性と出会うことで私たちは自身の個別性、ひとの個別性に気づいていくわけである。

本研究では、両親の養育態度に焦点をあて、両親の養育態度と青年期の孤独感との間の関連について検討することを目的とする。養育態度には過保護、養護の 2 側面がある (Parker, Tupling, and Brown, 1979)。子どもに干渉することの多い親を考えてみる。子どもにとっては干渉することの多い親、すなわち過保護の親は他者性に気づくきっかけになるであろう。過保護な親とは子どもにとっては邪魔な存在である。子どもの望みと違うことを親がするからである。子どもの思いと親の思いのずれがあればあるほど、子どもは親のあり方をきっかけに他者性について気づくことになる。一方、干渉することのない親、すなわち過保護でない親の場合、子どもは親を邪魔だと思わない。親が他者性をもって子どもに対しなからである。この場合、子どもはひとの個別性に気づくことが少なくなると考えられる。

本研究では未成熟な A 型と成熟した D 型と違いを養育態度の違いから説明しようとするものである。孤独感 D 型に判別されるものは、A 型に判別されるものにくらべて、過保護に育てられたと知覚しているものが多いと考えられる。

方法

対象者 大学生 98 名を対象とした。

測定尺度

(1) Loneliness Scale of Ochiai

落合（1983）の開発した孤独感尺度（Loneliness Scale of Ochiai）を用いた。LSO と略記されるこの尺度は、前述したように、人間同士の理解・共感の可能性についてのとらえ方の尺度（LSO-U）と、自己という存在の個別性について自覚についての尺度（LSO-E）のふたつの下位尺度からなる。

（2）Parental Bonding Instrument の日本語版

Parental Bonding Instrument (Parker, Tupling, and Brown, 1979) の日本語版 PBI (小川, 1991) を用いた。PBI 尺度と略されるこの尺度は、子どもからみた養育者の養育態度についての自覚的評価尺度である。本研究でも調査対象者である大学生たちの被養育態度を測定するために用いた。その日本語版である小川（1991）による日本語版 PBI は十分な妥当性と信頼性が確認されている。

本尺度によって、過保護と養護のふたつの次元から養育者の養育態度を測定することができる。過保護とは、子どもの自律性を尊重しない養育態度であり、「私のすることは何でもコントロールしたがった」といった 13 の態度か行動についての項目から構成されている。過保護得点が高いほど、過保護傾向が強く、自律を促す傾向が低いことにある。一方、養護とは、愛情深い養育態度をいい、例えば、「いつも温かく親しみのある声で話しかけてくれた」などの 12 の項目から構成されている。養護得点が高いほど、養護傾向が高く、無関心や拒否の傾向が低いことになる。これら計 25 項目について、16 歳までの親の行動や態度について想起してもらい、その行動や態度にもっともあてはまると思われるものを選ぶことを 4 件法（1 = 全くちがう、2 = どちらかといえばちがう、3 = どちらかといえばそうだ、4 = 非常にそうだ）で求めた。なお、PBI 尺度を用いる場合には、養育者として父親と母親のそれぞれについて回答を求めることが多いが、本研究では父親、母親の区別をせずに、「親」とひとくくりにして、親の養育態度について想起し回答するよう求めた。対象者の家庭環境に配慮したためである。

倫理的配慮、説明と同意

調査対象者には書類を用いて口頭で研究の目的を伝え、研究に協力する協力しないは自由であり、たとえ、回答をはじめた後であっても、中止してもよいことを伝えた。個人情報の保護についても説明し、個人が特定されることのないことや得られたデータの保管期間（5年間）とその後の破棄について約束した。また本調査によって、調査対象者に不利益が生じることがないこと、仮に生じた場合には調査実施者及び学校長等に申し立てるよう伝えた。調査協力応諾をお願いした後、協力してもらえる場合は、所定の欄に性別と生年月日を記入したうえで、評定を開始するよう求めた。

結果と考察

回答に不備のあった 11 名を除いた 87 名について分析を行った。

孤独感の類型

LSO から調査対象者を各類型に判別した。結果、A 型が 30 名、B 型が 0 名、C 型が 4 名、D 型が 53 名であった。本調査での各類型の出現率のパターンも、野上ら（2000）や小林（2006）と同様、A 型と D 型で全体を二分するようなパターンであった。B 型と C 型については少人数であったため、以下の分析 A 型と D 型について行うことにした。

孤独感の類型と両親の養育態度との関連

A 型と D 型といった孤独感の類型によって、両親の養育態度が異なるかを検討することが目的であった。PBI の養護因子得点の平均値が LSO の A 型と D 型とで差があるかどうかを t 検定を用いて検討したところ、LSO の型によって因子得点の平均値に差はなかった ($t(81) = .99, p = .32$)。PBI の過保護得点の平均値についても同様に t 検定を用いて検討したところ、D 型の過保護得点の

表 1. LSO の類型ごとの過保護及び養護因子の平均得点と標準偏差

		LSO	
		A 型	D 型
PBI	過保護	22.5 (4.4)	25.5 (4.8)
	養護	23.7 (5.5)	24.9 (5.5)

平均値は A 型に比べ高いことがわかった($t(81) = 2.79, p < .01$)。D 型の対象者は A 型に比べて自分たちが過剰な保護や干渉を受けたと知覚している。

自分と他者とが異なる存在であるとあらためて思うのは、自分と他者の考えが異なることに気づくときである。親から過剰な干渉を受けたととらえることは、親から望まない干渉を受けたととらえていることに等しい。望まない干渉を受けたととらえていることは、自分の考えとは異なる考えをもつ親がいるということである。このような親は子どもが他者性に気づくきっかけになっている。私たちが自己の姿に気づくのは、自分とは異なるあり方をしている他者に出会うときである。過保護に育てられたと知覚しているものは、そうでないものに比べて、他者性を多く経験していると思われる。そして、他者性を経験することで、自己のあり方に気づき、ひとの個別性に気づくきっかけになっていると思われる。そのため、孤独感 D 型のものが、A 型のものに比べて、より過保護に育てられたと知覚している本研究の結果が得られたと考えられる。

引用文献

- 小林邦雄 2006 大学生における孤独感と同一性の混乱—ひとつのケース・スタディー— 近畿大学生
物理工学部紀要, 17, 63-78.
- 宮下一博 1995 青年期の同世代関係落合良行・楠見孝(編) 講座生涯発達心理学 第4巻 自己へ
の問い直し 金子書房.
- 野上康子・天谷祐子・太田伸幸・栗田統史・布施光代・西村萌子・長谷川美佐子・胡琴菊 2000 青
年期の"孤独観"を測定する尺度の作成 Bulletin of the Graduate School of Education
and Human Development, 47, 247-268.
- 落合良行 1974 現代青年における孤独感の構造 教育心理学研、22、162-170.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究、31、332-336.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研
究、44、55-65.
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造、風間出版.
- Weiss, R. 1973 Loneliness: The experience of emotional and social isolation. Cambridge,
The M.I.T. Press.

概要

本研究の目的は、両親の養育態度と青年期の孤独感との間の関連について検討することにあった。大学生 98 名を対象とした。両親の養育態度の測定には、Parker ら (1979) が開発した PBI 尺度 (Parental Bonding Instrument) を用いた。孤独感の測定には、落合 (1983) の開発した LSO を用いた。LSO から調査対象者を各類型に判別した。結果、A 型が 30 名、B 型が 0 名、C 型が 4 名、D 型が 53 名であった。B 型と C 型については少人数であったため、以下の分析は A 型と D 型につ

いて行うことにした。PBI の養護因子得点の平均値が LSO の A 型と D 型とで差があるかどうかを t 検定を用いて検討したところ、LSO の型によって因子得点の平均値に差はなかった。PBI の過保護得点の平均値についても同様に t 検定を用いて検討したところ、D 型の過保護得点の平均値は A 型に比べ高いことがわかった。D 型の対象者は A 型に比べて自分たちが過剰な保護や干渉を受けたと知覚している。この結果は、青年期以前に受けた養育が青年期での他者や自己との向き合い方に影響を与える可能性を示唆する結果である。